



ウイльта衣服（左）／ナーナイ衣服（右） 北海道立北方民族博物館蔵

## 目次

### ① 展示紹介

平成 28 年度アイヌ工芸品展

特別展 「イカラカラーアイヌ刺繍の世界ー」

### ② 収蔵史料（資料）紹介

歴史資料課 「今川家文書」

行政資料課 「2002年ワールドカップ関係 行政刊行物」

学芸課 「鬼瓦」 ちょうじゃやしき 長者屋敷遺跡出土

### ③ トピックス

平成28年度 特別展Ⅱ  
平成28年度アイヌ工芸品展「イカラカラーアイヌ刺繍の世界ー」  
会期：平成29年2月4日（土）～3月20日（月）

北海道を中心に樺太<sup>からふと</sup>から千島列島まで生活圏を広げていたアイヌは、寒冷で厳しい自然環境の中で知恵と工夫をもちいて生き抜くとともに、周辺の諸民族と交易や交流をおこない、独自の文化を発展させてきました。その歴史は、アイヌの服飾からもうかがい知ることができます。

伝統的な服飾には、植物から採取した内皮繊維のほか、動物の毛皮、サケなどの魚皮、交易で入手した木綿や絹などの多様な素材が用いられています。刺繍によって施される文様をはじめ、色布や色糸を巧みに活かす装飾には、受け継がれる伝統と作り手の美意識が反映されています。

ところで、茨城には北海道に関心をもった先人の足跡が遺されています。水戸藩2代藩主徳川光圀<sup>とくがわみつくに</sup>は、大船を建造して石狩<sup>いしかり</sup>地方との交易を、9代藩主徳川斉昭<sup>とくがわなりあき</sup>は、蝦夷地開拓の可能性を探りました。命を受けた藩士たちは、蝦夷地の踏査を行い、気候風土やアイヌの生活文化を詳細に記録しました。

本展では、華やかで力強いアイヌ刺繍に注目しながら、儀礼などで使用された晴れ着とともに、首飾り、耳飾りといった装身具などの18世紀から現代にいたるアイヌの服飾を紹介します。また、国宝「伊能忠敬測量図下図」（伊能忠敬記念館蔵）、重要文化財「日本国図（蝦夷）」（東京国立博物館）、重要文化財「聖徳太子絵伝」（那珂市上宮寺）など、アイヌの歴史を伝える貴重な絵画資料や歴史資料を紹介し、常陸国、とりわけ水戸藩と蝦夷地の歴史的関係についてスポットをあてます。

## 時代と地域からみたアイヌの衣服

江戸時代の探検家、水戸藩士の木村謙次<sup>きむらけんじ</sup>が収集したアットゥシは、現存最古のアットゥシと考えられています。この木村謙次収集資料をはじめ、江戸時代後期から昭和初期に至るまでの制作年代が推定できる衣服を紹介し、アイヌが伝統的に居住してきた北海道、樺太、千島から視野をひろげ、ニブフやウイルタなどの北方諸民族の衣服も紹介します。



木村謙次<sup>きむらけんじ</sup>収集<sup>じしゅうしゅう</sup>のアットゥシ（樹皮繊維衣服<sup>じゆひせんい</sup>）個人蔵<sup>いふく</sup>

江戸時代後期、蝦夷地に2度赴いた木村謙次が収集したアットゥシです。現存最古のアットゥシと考えられています。背面には1本もしくは2本の刺繍が置布の上に平行に刺されています。この点線状の刺繍は、現代には受け継がれていない技法で、アイヌ衣服文化の歴史を考える際に最も重要なアットゥシのひとつとなっています。現在も、木村家の家宝として代々受け継がれています。



ウイルタ<sup>いふく</sup>衣服 北海道立北方民族博物館



ニブフ<sup>いふく</sup>衣服 北海道立北方民族博物館



ナーナイの衣服<sup>いふく</sup> 北海道立北方民族博物館

アイヌの人々は周辺のウイльта、ニヅフ、ナーナイの人々と互いに影響しあってきました。ウイльтаは樺太（サハリン）に、ニヅフは同島からアムール河口付近、ナーナイはアムール中流域に暮らしてきました。ウイльта、ニヅフ、ナーナイの衣服文様にも、アイヌ文様と同じ様に曲線やうずまきがよく使われています。

### 布と糸からみたアイヌの衣服

アイヌの衣服は、オヒョウなどの樹皮繊維、イラクサなどの草皮繊維、本州からもたらされた木綿など、様々な素材で作られていますが、背や襟、袖、裾に施された美しく力強いアイヌ文様が大きな特徴となっています。その作り手たちは、刺繍とともに、衣服の上に木綿や絹などの布を巧みに配置することで独自の文様を発展させてきました。ここでは、衣服とともに鉢巻きや前掛けなど布に見られるアイヌ文様の美と技を紹介します。また、首飾りや小刀といった装飾品・携行品も紹介します。

### アットウシ（樹皮繊維の衣服）

アットウシは樹皮の繊維で織られたアイヌの伝統的衣文化を代表する衣服です。オヒョウ、ハルニレ、シナノキなどの木の内皮繊維からつくられるもので、温泉や沼などに浸け薄皮状に一枚ずつ剥がれるようになった樹皮を細く裂いて糸にし、織り機にかけて反物をつくります。晴れ着、日常着として幅広く利用され、丈夫で耐水性にも優れていることから漁師の作業衣として和人の間にも流通しました。布や刺繍などで施される文様にも地域的な特徴を見ることができます。衣服の形状による男女の違いはないとされています。



アットウシ (樹皮繊維衣服) 国立民族学博物館



アットウシ (樹皮繊維衣服)  
一般法人アイヌ民族博物館

### テタラペ (草皮繊維の衣服)

草皮の繊維で織られた衣服です。エゾイラクサ、ムカゴイラクサの繊維からつくられるもので、晴れ着、日常着として着ました。イラクサの繊維を撚り合わせて糸にし、織り機にかけて反物をつくります。地布に木綿や絹の布を縫いつけ、その上から刺繍を施すものが一般的ですが、あらかじめ刺繍を施した布片を肩や背、胸元に縫いつけるものも見られます。



テタラペ (草皮繊維衣服) 国立民族学博物館



テタラペ (草皮繊維衣服) 北海道博物館

## 木綿衣服

木綿地に色とりどりの絹や更紗，メリンス，綿などの細いテープ状の布を直線的に置いたり，布を折り曲げゆるやかな曲線を描くように置いて，その上から刺繍を施す，多彩で華やかな木綿衣服です。仕立ては単衣で，地布には紺の無地や縞，柄物などさまざまな木綿布が使われます。



ルウンペ（木綿衣服）北海道大学植物園



カパラミプ（木綿衣服）苫小牧市美術博物館

## 鉢巻き

樹皮繊維や木綿でつくられた鉢巻きです。男女とも用いましたが，刺繍文様のあるものは20世紀初頭までは主として男性が用いました。



マトンプシ（樹皮繊維鉢巻き）東京国立博物館



マトンプシ（木綿鉢巻き）天理大学附属天理参考館

## 前掛け

樹皮繊維で織られた生地や木綿布に、衣服同様の置布をあてて刺繍を施したものや、直接、布地に刺繍を施したものなどがあります。ふだんは労働や家事に用いるほかに衣服の前がはだけた時に肌や肌着が見えないよう隠すためのものでもありました。



マエタレ (樹皮繊維前掛け)  
国立民族学博物館



マエタレ (木綿前掛け)  
国立民族学博物館

## 常陸国そして蝦夷地

江戸時代、水戸藩は他藩にさきがけて北方に関心を寄せ、風土やそこに暮らすアイヌの文化についての知識を求めました。水戸藩2代藩主徳川光圀は、蝦夷地探検を計画し、大船を建造し、石狩地方との交易や調査を実施しました。また、蝦夷地に強い関心を持っていた9代藩主徳川斉昭は、藩士たちに蝦夷地の調査を命じ、アイヌの生活についても詳細に報告させています。蝦夷地を調査した茨城ゆかりの探検者たちが記したアイヌの人々の生業などを記録した文献や、実際にアイヌの人たちと生活を共にした時の様子を描いた絵入りの日記などの資料をとおして、常陸国と蝦夷地との関わりを探ります。

### 第1節 聖徳太子絵伝



聖徳太子絵伝（部分）重要文化財 元亨元年（1321）上宮寺（茨城県立歴史館寄託）

聖徳太子（574～622）の事績を描いた14段からなる卷子状の絵伝です。5段目「十歳降伏蝦夷所」には、聖徳太子が10歳のときに東国の蝦夷との戦いで、太子が蝦夷を諫めてなだめている場面が描かれています。蝦夷は、どんぐり眼で鉢巻きを締め、上半身裸の者や鳥の羽で作った腰蓑を付けた姿や筒袖の着物を着た姿で描かれています。

## 第2節 描かれた蝦夷地

江戸時代で蝦夷地といえば、現在の北海道、樺太、千島列島の総称に近いものでした。松前氏が元禄13年(1700)に幕府に提出した国絵図は、松前地方西南部沿岸地方が比較的詳しいだけで、その他の沿岸地方については、若干地名が記され、楕円形の蝦夷地、その北に樺太、東側には千島列島が点々と描かれている程度にすぎませんでした。民間に伝わった蝦夷地図などは、鎌形の半島か、または細長い島としてしか描かれていませんでした。



えぞず 蝦夷図 写本

北海道大学附属図書館 (北方資料室)

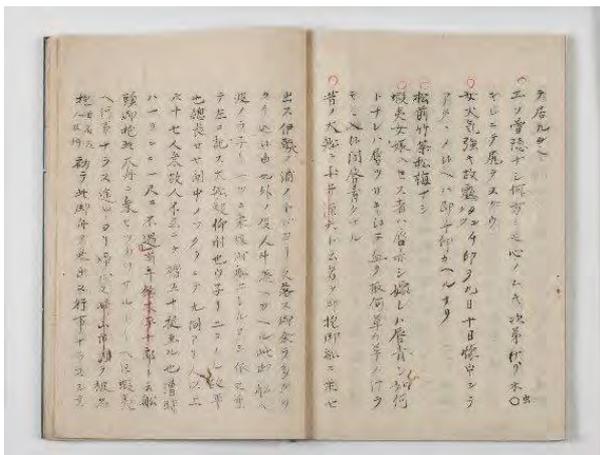


ばんろくくにえ ず 元禄国絵図 原本：元禄13年(1700)

北海道大学附属図書館 (北方資料室)

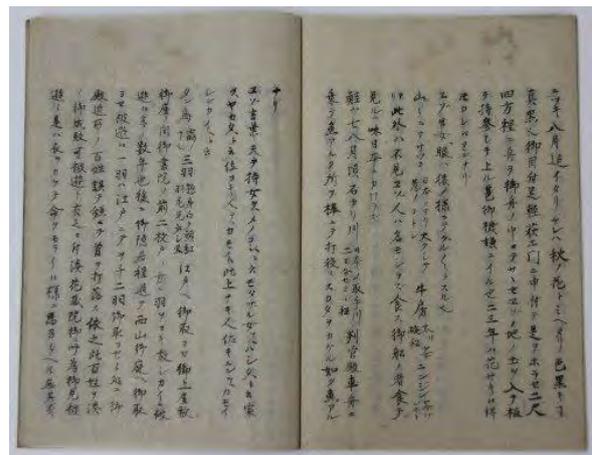
## 第3節 徳川光圀 蝦夷地へのまなざし—快風丸の蝦夷地派遣—

水戸藩2代藩主徳川光圀は、大船「快風丸」を建造し3度蝦夷地に派遣しました。1・2回目の探検は十分な成果を得ることができませんでしたが、元禄元年(1688)の3回目の探検では石狩地方まで達し、蝦夷地の情勢を知る上で水戸藩に大きな成果をもたらしました。



かいふうまるえ ぞぎきがき 快風丸蝦夷聞書 江戸時代

常磐神社 (茨城県立歴史館寄託)



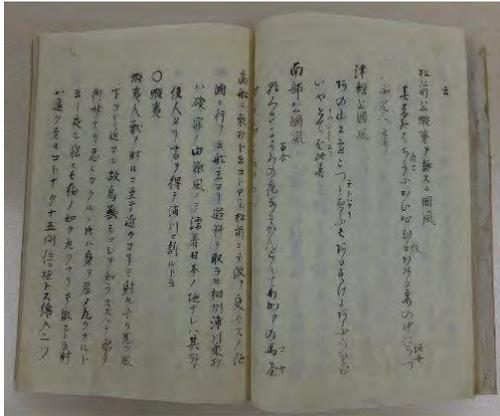
かいふうまるのこと 快風丸之事 江戸時代

茨城県立歴史館

## 第4節 水戸藩と蝦夷地

### ①木村謙次の蝦夷地探検

寛政5年(1793)に、水戸藩は木村謙次と武石民蔵たけいしたみぞうを蝦夷地に派遣しました。その情報収集は『北行日録』ほっこうにちろくに詳細に記録されています。5年後の寛政10年に、木村謙次は幕府巡見隊の一員として近藤重蔵こんどうじゅうぞう、最上徳内もがみとくない、村上島之允むらかみしまのじょうらとともに蝦夷地に渡り、当地の情勢を知る上で大きな成果をもたらしました。その時の報告書『蝦夷日記』えぞにつきは、実地見聞録として重視されました。



ほっこうにちろく かんせい  
北行日録 寛政5年(1793)

国立公文書館

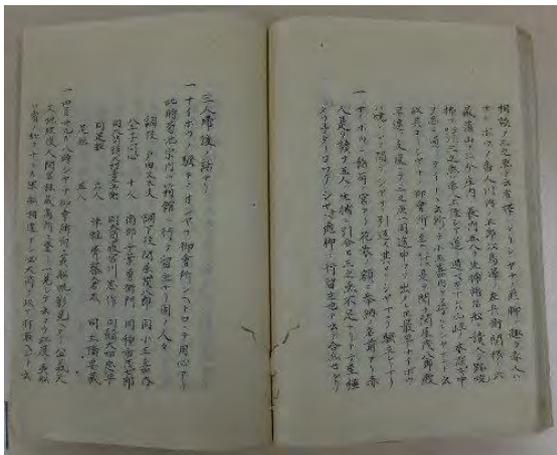


えぞにつき かんせい  
蝦夷日記 寛政11年(1799)

ながしまやすのぶ 写 茨城県立歴史館

### ②秋葉友衛門と奥谷新五郎の蝦夷地踏査

ロシア船の蝦夷地襲撃報告を受けた水戸藩が、情報収集のために松前(箱館, 現・函館)に秋葉友衛門あきばともえもん、奥谷新五郎おくのやしんごろうを派遣しました。『北遊記』ほくゆうきには、文化4年(1807)9月1日から10日の間に収集したロシアの襲撃事件の風聞が記述されており、エトロフ島シャナ会所まみやりんぞうで防戦した間宮林蔵の名前も記されています。



ほくゆうき ぶんか  
北遊記 文化4年(1807) 国立公文書館

### ③徳川斉昭と豊田天功の蝦夷地研究

水戸藩9代藩主徳川斉昭は、若い頃より蝦夷地に関心を寄せて蝦夷地関係書を数多く集めていました。天保5年（1834）、斉昭は幕府に対して蝦夷地拝領を願い出て、自ら蝦夷地経営に乗り出そうとしました。天保9年には那珂湊の豪商だった大内清衛門を極秘に蝦夷地に派遣しました。また、嘉永6年（1853）より、幕府に蝦夷地経営を働きかける一方、その歴史をまとめるべく蝦夷地探検者たちの著書や報告書をもとに、豊田天功に命じて当時の蝦夷地研究の集大成ともいふべき『北島志』を編纂させました。



刀 水戸市指定文化財 安政4年（1857）

弘道館鹿島神社（茨城県立歴史館寄託）

安政4年、弘道館内に鹿島神社を造営した際に奉納された刀です。徳川斉昭自らが鍛えたものです。『水戸烈公詩歌文集』には、刀を奉納した斉昭が「大神のたけくさかしき心もて蝦夷が千島もきり開かなむ」の一首を、刀を納める箱蓋に記したことが記述されています。



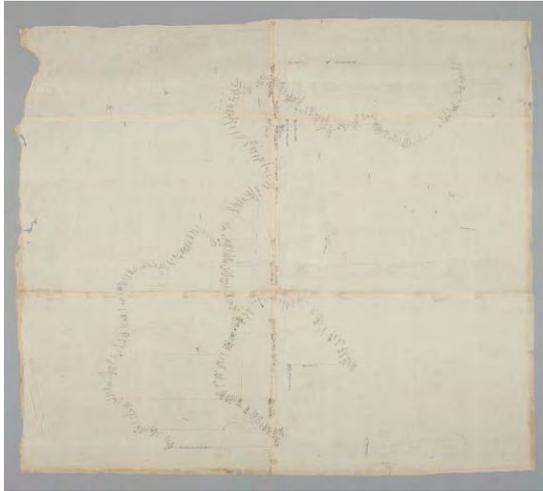
北島志 慶応3年（1867） 石川義路 写

個人（茨城県立歴史館寄託）

## 第5節 水戸藩ゆかりの先人と蝦夷地

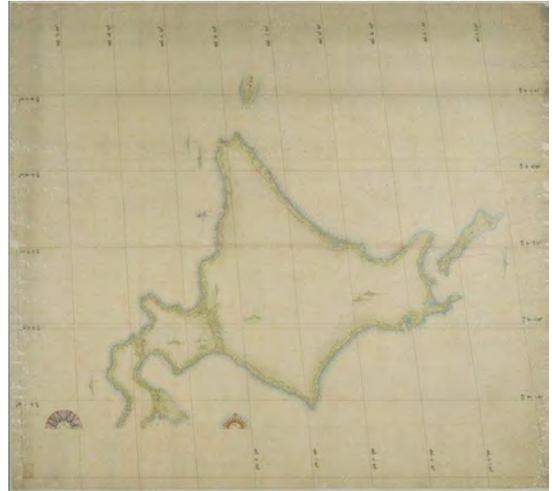
### ①伊能忠敬と間宮林蔵の蝦夷地探検

寛政12年(1800),伊能忠敬は幕命により蝦夷地測量事業を進める中,間宮林蔵と箱館(現・函館)で出会ったことを機に,蝦夷地測量を通して師弟の絆を結び,天体観測や沿岸測量の術を伝授しました。林蔵は,蝦夷地探検で培った豊富な知識や海防に対する見識が,水戸藩に高く評価されて斉昭の招きを受けていました。



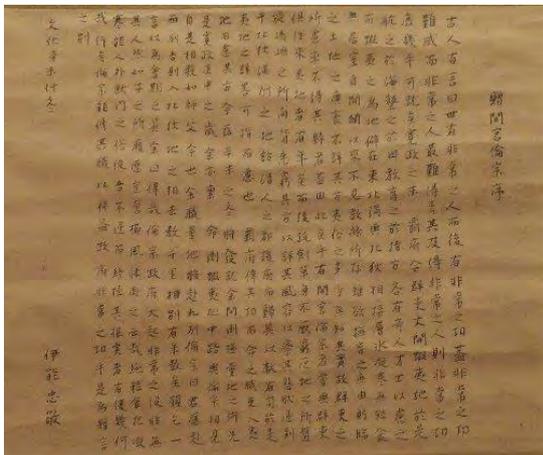
いのうただたかそくりょうず  
伊能忠敬測量図(自モリ川至ベシイハキ)

国宝 江戸時代 伊能忠敬作  
伊能忠敬記念館



にほんこくず いのうしょうず えぞ  
日本国図(伊能小図・蝦夷)

重要文化財 江戸時代 伊能忠敬作  
東京国立博物館



ぞうまみやともむねじよ  
贈間宮倫宗序 国宝 文化8年(1811)

伊能忠敬筆 伊能忠敬記念館

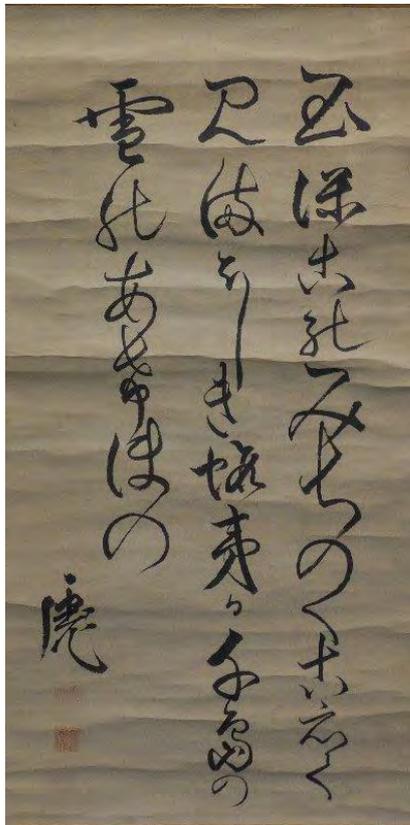


とうだつきこう ぶんか  
東韃紀行 文化6年(1809)

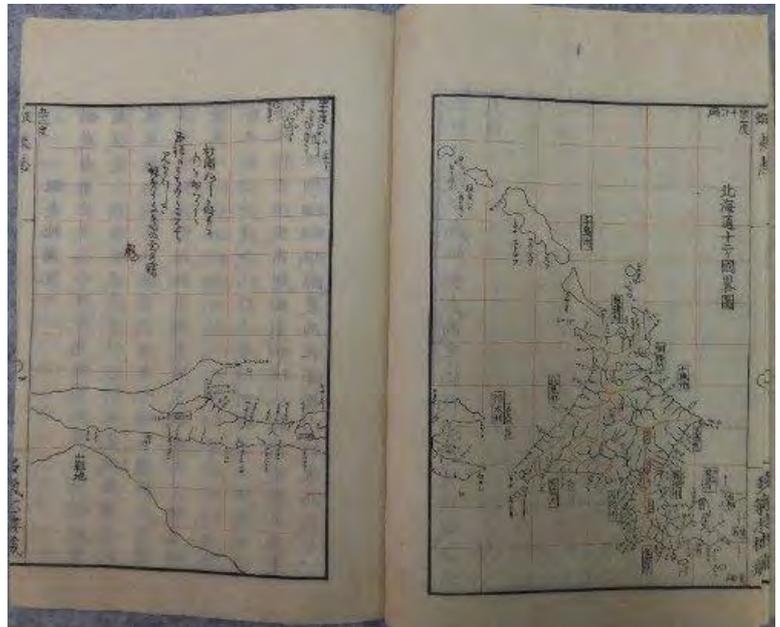
茨城県立歴史館

### ②松浦武四郎の蝦夷地探検

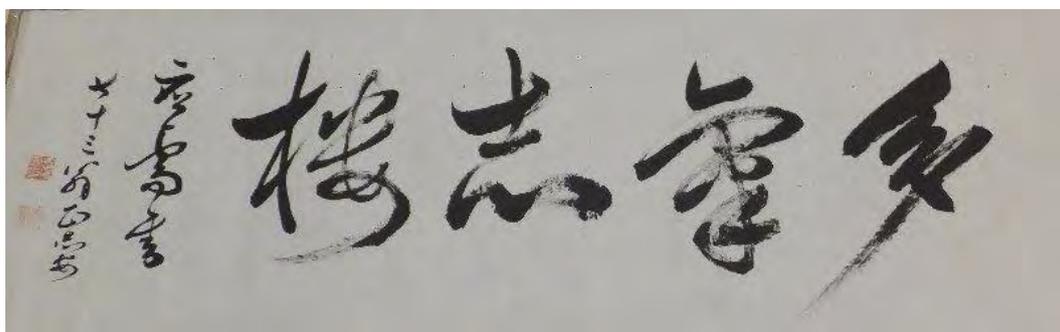
松浦武四郎<sup>まつうらたけしろう</sup>もまた、水戸藩と深い関わりをもった一人です。武四郎は、弘化2年（1845）から安政5年（1858）まで6回にわたって蝦夷地、樺太、北方諸島の探検を行い、多数の紀行や地図を出版したことで知られています。蝦夷地探検を機に藤田東湖<sup>ふじたとうこ</sup>や会沢正志齋<sup>あいざわせいしさい</sup>などと交友を結んでおり、蝦夷地の調査記録『蝦夷日誌』<sup>えぞにっし</sup>を水戸藩をはじめとする諸藩や幕府に献上しました。



玉ほこの詠草<sup>たまほこのえいそう</sup> 重要文化財 江戸時代  
藤田東湖筆<sup>ふじたとうこ</sup> 松浦武四郎記念館



蝦夷志<sup>えぞし</sup> 重要文化財 明治2年（1869）  
松浦武四郎著<sup>まつうらたけしろう</sup> 松浦武四郎記念館



多氣志楼<sup>たけしろう</sup> 重要文化財 安政2年（1855）  
会沢正志齋筆<sup>あいざわせいしさい</sup> 松浦武四郎記念館

（史料学芸部 学芸課長 飯塚 信久）

## 収蔵資料紹介「今川家文書」

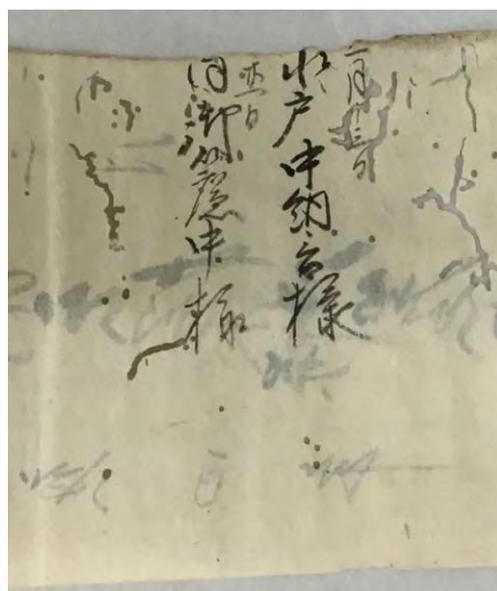
今年度茨城県立歴史館に新たに寄贈・寄託された資料の中から、今回は追加寄託いただいた今川家文書を紹介します。

今川家文書は、筑波郡台町（現つくば市）にある今川家に伝来した文書です。今川家文書は以前に一度寄託いただいており、今回新たに 64 点の史料を追加寄託いただきました。

江戸時代の台町は大名細川氏を領主とする谷田部藩（茂木藩）領でした。徳川秀忠に仕えた細川興元（細川藤孝次男）が慶長 15 年(1610)に下野国芳賀郡内に 1 万石を与えられ、茂木を居所としました。その後、大坂夏の陣の功により常陸国筑波・河内二郡内に 6200 石加増され、本陣を茂木から谷田部に移し、谷田部藩となります。陣屋は茂木と谷田部の 2ヶ所に置かれ、江戸柳原に江戸屋敷を置きました。藩主は興元から興貫まで 9 代にわたります。

今川家は台町村及び若栗村の兼帯庄屋を勤めたと伝えられています。当文書群は、今川家が庄屋を勤めたことで作成・授受されたものがほとんどであり、幕末期の御用留や年貢取立帳、明治初期の公用留など公的文書が多数を占めています。

【史料 1】の「水戸中納言様并御廉中様人馬割合帳」は、慶応 4 年(1868)3 月に徳川慶篤と継室である鋭姫(広幡紀子)が水戸へ赴くために水戸街道を通行した際に、若栗村が人馬を負担した時の記録です。表紙裏には「三月十三日 水戸中納言様／[ ] 廿一日 同御廉中様」と記載されていますが、実際に通行した日は少し前後したと考えられます。



【史料 1】「水戸中納言様并御廉中様人馬割合帳」(No.863)

慶篤の就藩は、慶篤が水戸藩主就任以降、この時に初めて実現されました。藩主慶篤の水戸帰国は、幕末期の混乱の中で水戸藩が政治的社会的信頼を取り戻すために必要なことでありました。

当初は3月10日に江戸邸出発、14日水戸着の予定でしたが、実際には3月17日に江戸邸を出発し、5日の道中を経て21日に着城となりました。このような日程の変更は、当時の世情不安を反映しての延期であり、また、慶篤自身の体調が整わなかったためであると考えられます。そのため、水戸帰国から20日も経たぬ4月5日に慶篤は水戸城にて亡くなりました。このように慶篤の水戸帰国はわずかな期間ではありましたが、水戸士民に大きな影響を与えたといわれています。

また、【史料2】の「御官軍御通行牛久人馬割合帳」は、明治2年(1869)に官軍が牛久宿を通行した際、若栗村が負担した人馬及び金銭を記したものです。牛久宿は水戸街道千住宿から8つ目の宿場町であり、今川家が庄屋を勤めていた若栗村は牛久宿の助郷村でした。助郷とは、諸街道の宿場の人馬だけでは足りない場合、宿場周辺の郷村が補助的に人馬を提供する制度のことです。そのため、このような史料も今川家に伝来しました。

この時期の日本は慶応4年1月の鳥羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争の最中であり、江戸と水戸を繋ぐ水戸街道に位置する牛久宿も大きな影響を受けていたと考えられます。

今回ご紹介した2つの史料はその当時の牛久宿周辺の郷村の様子を窺える史料です。これらの史料以外にも、官軍のために谷田部村近隣農村及び組合村々は食糧を差し出すようにとの御触の写(「官軍兵食賄米差出令書写」(No.58-1))なども今川家には伝来しており、今川家文書はこの地域の特色を示す貴重な資料であるといえます。

(史料学芸部歴史資料課 資料調査専門員 中村 早知恵)



【史料2】

「御官軍御通行牛久人馬割合帳」(No.874)

## 資料紹介

### 「2002年ワールドカップ関係 行政刊行物」



## 寄せられた手紙・メール

**今**回のワールドカップで日本ーロシア戦と、カシマでのドイツーアイルランド戦を観戦しましたが、カシマのワールドカップへの取り組みはロシア戦の勝利と同じ位感動しました。

以前より釣りに行く度に街をあげてアントラーズを応援する雰囲気、ステッカーを貼った車の多い事に驚いていましたが、今回のワールドカップでは「すばらしい!」のひと言でした。電話で親切に対応して下さった委員会の方、道を丁寧に教えて下さった役場の方、笑顔で接して下さった街の方々。

競技場横でテント村で食事ができたり、地元の方が無料でペインティングをやって下さってくれたことも〇〇ではやってなく、後から驚きました。(ペインティングをやって下さった地元の方も、笑顔でフレンドリーで良かったです。)

また競技場も今回の会場の中で、もっともすばらしい会場だと思いました。ピッチとスタンドの一体感、サポーターの声も綺麗にこだまする感じも良く、なんでカシマが決勝トーナメントや日本戦で使われないのか非常に残念に思いました。

関係者の方々は非常にご苦労も多かったと思います。ご苦労様です。そして感動をありがとうございます。これからの日本サッカーのますますの発展の為に、今後も世界に通じるより良いサッカーの街づくりに期待しています。これからも頑張ってください。よろしくお願い致します。すばらしい大会を体験させていただき、ありがとうございました。

東京都江戸川区  
33歳 男性

上記の写真と感想は、当館所蔵の行政刊行物『2002FIFA ワールドカップ™茨城開催報告書』(以下、『茨城開催報告書』と表記)の内容です。今から15年前、オリンピックに並ぶ世界的大イベントが、茨城県鹿嶋市も一会場として日韓共同開催で行われました。感想からは、茨城会場の運営に対する観戦者の感謝の気持ちが伝わってきます。

当館では、2002年ワールドカップ関係の行政刊行物を40点以上所蔵し、公開しております。ここでは、『茨城開催報告書』を中心に、茨城招致や運営等の諸活動、観戦者の声を紹介します。



## 1 茨城開催の実現

『茨城開催報告書』のP66～P110は、「開催までの足跡」という内容で、以下の項目で構成されています。

- 1 茨城開催の実現へ向けて
- 2 推進体制
- 3 気運醸成活動
- 4 コンフェデレーションズカップ（プレ大会）
- 5 関連道路
- 6 公開合同総合訓練
- 7 住民説明会
- 8 カシマサッカースタジアム
- 9 スタジアム用地買収
- 10 公認キャンプ候補地と公式練習場

項目を見るだけでも、開催までの遠く、多岐にわたる道のりが伝わります。「1 茨城開催の実現へ向けて」の要約を以下に示します。

### (1) 高揚するサッカー

平成5年5月Jリーグ開幕以来の鹿島アントラーズの活躍によるサッカー人気の盛り上がりと地域の活性化が、本県への招致活動に大きくつながりました。

鹿島地域活性化のため、日本リーグ2部所属の住友金属がプロリーグ参加を決断したのは平成2年のことです。Jリーグ初年度加入の陳情に行った際、当時のプロリーグ設立準備室長から「初年度加入は99.9999%無理だが、日本で初めての屋根付専用スタジアムでもできれば話は別だが」と言われました。

結局、茨城県は日本初の全席個室屋根付・15,870人収容のサッカー専用スタジアム「茨城県立カシマサッカースタジアム」を建設することとなり、また、地元市町や企業など関係者の一体となった熱意が通じ、平成3年、住友金属はJリーグ初年度の加入を果たしました。そして、Jリーグ開幕後の鹿島アントラーズの活躍により、県全体にサッカー人気広がりました。また、地域ボランティアの活動も見逃せません。鹿島アントラーズの例は、サッカーにより地域が活性化した好例として、全国で紹介

されました。

## (2) 県招致委員会の設立

平成4年6月茨城県サッカー協会提出の「2002年ワールドカップ・サッカー大会本県開催招致に関する請願」が県議会において採択され、平成4年9月に国内開催候補地出願を日本招致委員会に提出し、平成5年1月、茨城県は、国内開催候補地15自治体の一つに決定されます。平成5年4月、「2002年ワールドカップ茨城県招致委員会」(事務局は県企画部地域振興室計画調整課)が設立され、本県の招致活動が始まります。

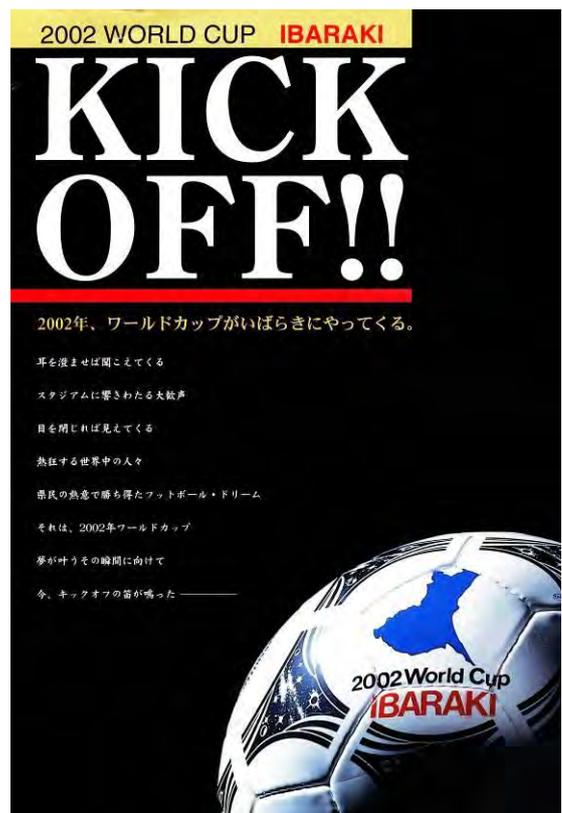
## (3) 招致へ向けた活動

本県の招致活動では、各種イベントへの出展、ポスター・パンフレットの配布などを行いました。知事も日本招致シンポジウムにおいて自治体代表でパネラーを務めたり、海外からの訪問団に招致自治体代表として対応したりするなど、積極的な招致活動を展開しました。

以上が、「1 茨城開催の実現へ向けて」の要約ですが、日韓共同開催が決定したのは平成8年5月、茨城県が国内開催10自治体の一つに選定されたのは平成8年12月のことです。

右の写真は、当館所蔵の行政刊行物『**KICK OFF 2002年ワールドカップがいばらきにやってくる**』です。本県での開催決定後、「2002年ワールドカップ茨城県招致委員会」は、「2002年ワールドカップ茨城県開催準備委員会」に改組し、本格的な準備に取りかかる体制を整備します。この刊行物は、茨城県での開催決定後、茨城県開催準備委員会が編集・発行したものです。表紙の文言意外にも「世界最高のプレーが“いばらき”で」、「私たちの手で最高の大会を」、「ワールドカップでステップアップいばらき」などと書かれ、県内開催のよろこびと意気込みが伝わってきます。

そして、2002年5月31日～6月30日の開催期間中、茨城県ではカシマスタジアムにおいて、6月2日、5日、8日に第1ラウンドの3ゲームが実施されました。

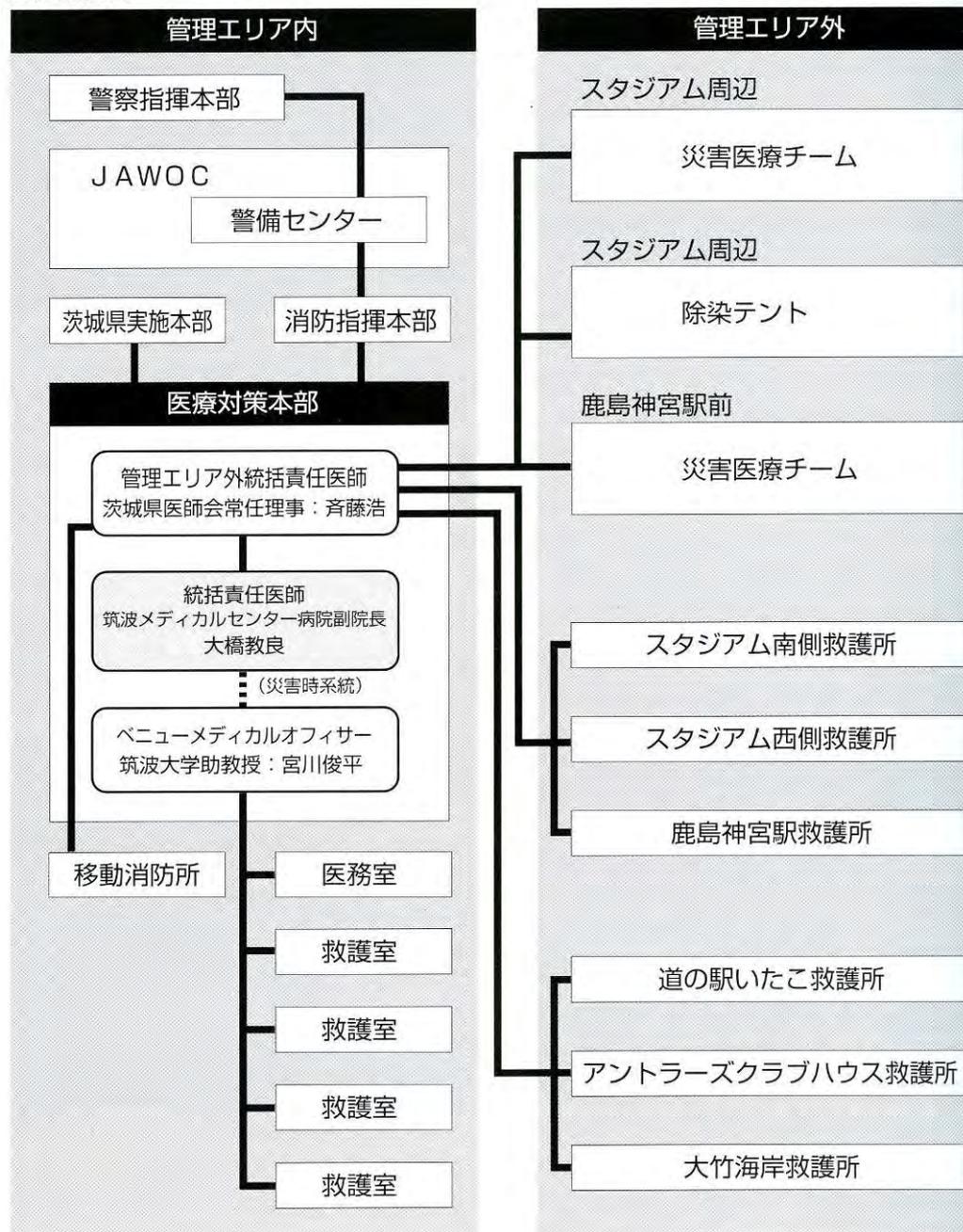


## 2 試合の裏側で

『茨城開催報告書』の P32～P65 は、「大会期間中の活動実地状況」という内容です。そこに示されている活動を 2 つ紹介します。

### (1) 医療対策

医療統括図



上記の医療統括図（『茨城開催報告書』より）のとおり、万全な医療体制を整えました。試合開催 3 日間で、スタジアム内救護室対応傷病者は 69 名で、うち救急車搬送が 4 件発生しました。スタジアム外の救護所では 151 人の傷病者で、いずれも軽症で救急車搬送はありませんでした。

(2) ボランティア活動

スタジアム内で観客誘導・整理やメディアスポンサー対応などの業務に携わる「2002 FIFA ワールドカップ日本組織委員会(JAWOC)によるボランティア」、管理エリアの外側で総合案内や観客誘導などの業務に携わる「開催地ボランティア」の2種類のボランティアが大会運営に参加しました。研修については、全体研修(2回)、業務別研修(4回)、実地研修(3回)、直前研修(2回)が実施されました。

下記の表と写真は、『茨城開催報告書』に示されている「開催地ボランティア」の活動の様子です。

開催地ボランティア業務・日別参加実績

業 務	5/26	5/27	5/28	5/29	5/30	5/31	6/1	6/2	6/3	6/4	6/5	6/6	6/7	6/8	6/9	合計	
語 学	英語	4	3	4	7	4	6	12	31	11	7	21	5	6	26	5	152
	スペイン							4	19	2							25
	ドイツ										3	10	3				16
	イタリア													5	12	2	19
	クロアチア														1		1
	韓国語								1								1
計	4	3	4	7	4	6	16	51	13	10	31	8	11	39	7	214	
総合案内	3	3	3	3	4	2	6	25	6	4	23	4	6	28	4	124	
イベント								22			16			22		60	
環境美化								24	77		42	73		51	75	342	
観 客 誘 導	観客誘導補助							34			33			26		93	
	駐車場管理							112			109			116		337	
	計							146			142			142		430	
合 計	7	6	7	10	8	8	22	268	96	14	254	85	17	282	86	1170	



環境美化ボランティア (鹿嶋地区交通安全母の会連合会)



### 3 観戦者の声(『茨城開催報告書』より)

# 拝

啓 立夏の候いかがお過ごしでしょうか?

「ワールドカップ」もいよいよ終盤になり、ますます盛り上がっていますが、突然なのですが、お礼のお手紙をお送り致します。

私たち家族〔主人、私(主婦)、長女(7才)、長男(6才)、次女(4才)〕は夢にまで見たチケットを開催地枠で申し込み、幸運にも4枚、手に入れることができました。「ワールドカップ」が始まる数ヶ月前からワクワクし、6月8日の「イタリア×クロアチア」戦を迎えました。

いよいよ待ちに待ったその日、朝8時に家を出て、私と主人、長女、長男の4人で鹿嶋へむかって出発しました。次女はお留守番です。そして、早めの昼食をとり、12時頃には、アントラズ駐車場に着くことができました。13時、早々にシャトルバスへ乗りこみ、約15分程で、夢のカシマサッカースタジアムに到着しました。まず、わいわい広場でイタリアの小旗を買いました。そこで浴衣を着た店員さんに声を掛けられ、「海外から来たサポーターにこれを渡すと喜ばれますよ。」と折り鶴をいただきました。心のこもった手作りのものでした。次に「フェイスペインティングコーナー」に並びました。ちょうど混雑していて、30分位並んだ頃でしょうか。次がやっと長男の番になるという所で、暑さもあってか、座りこんでいたその長男が、テントのなかで嘔吐してしまいました。後ろに並んでいた家族の方や、コーナーの係の方が嫌な顔ひとつもせず、本当に心配してくれ、タオルやティッシュペーパーをくれたりと、いろいろ気を使ってくれ、本当にうれしかったのを覚えています。そして係の方がこの時言って下さった一言がありがたかったことか…。「こんなことは全然気にしないで今日は、ワールドカップを目一杯楽しんでいって下さいね。」心からそう言って頂けたように思いました。その後、係員の方々の素早い対応でよごれてしまったその場所も掃除をして頂き、私と長男はまた別の係員の方に救護所に案内してもらい休むことができました。後で聞いた話ですが、主人の友人がその後偶然にも「ペインティングコーナー」にいったそうです。それ以降は子供を優先してくれていたそうです。こんな心配りがとてもうれしかったです。長男は、その後お医者様にお世話になり、無事回復し、4時半頃にはスタジアムに入る事ができました。しかし、また調子が悪くなり2度、3度と嘔吐してしまいました。その際にもすぐそばにいた場内警備の警察の方や、見ず知らずの方

がすぐかけよってきて下さり「ボク、大丈夫?」と言葉をかけてくれ、素早い対応によってスタジアム内の医務室に連れて行って頂きました。約1時間、アクエリアスを少しずつのませながら横になり、いよいよ試合が始まる6時頃、調子もよくなったので、私と長男は主人と長女のいるスタジアムの席につきました。が、また長男は具合が悪くなり、ものの2、3分しかスタジアムにはいることができず、とんぼ帰りで医務室に戻りました。そしてお医者様に点滴をして頂き、医務室の中でテレビを通して声だけの観戦となりました…。2時間ほど、お世話になり、試合が終了して、ドンドンという音(後から火花だったということを知りました。)が終わる頃、点滴も終了しました。医務室の先生や看護婦さんは、とても優しく、本当に親切で心から感謝し、その場所を後にしました。そして、せめて最後に写真だけでもと思い、ほとんどの人が帰ってしまったスタジアムで、長男はイタリア人の女性サポーターの方に声を掛けられ、無事、思い出を残すことができました。その際には、「わいわい広場」でいただいた折り鶴をそのイタリア人の女性サポーターに渡すことができました。お礼をいって、その方たちと別れ、いよいよスタジアムを後にしようとしたその時です。おそらく私たちがほとんど最後だったと思います。ゲートを出る時に、係の方やボランティアの方々に、大きな声で「ありがとうございました!!」と声を掛けられ、とても心が温まりました。シャトルバスも最後の便で、駐車場に着くと、今度はそこで売店をしていた方にも「どこから来たの?気をつけて帰ってね。」など声を掛けられ、とても親切に接して頂きました。

その日の試合は、残念ながら観戦することができなかったけれど、私たち家族にとっては、関係の皆さんの心からの対応にとっても感動し、試合以上に思い出になりました。今、日本人が忘れかけている、大切な物を改めて見直し、大変いい勉強をさせて頂きました。

「ワールドカップ」が始まる前からの準備、そして始まってからの気配りなどの皆さんの努力に拍手をおくりたいです。私たちにとっては「幻のワールドカップ」になってしまいましたが、もうひとつの「ワールドカップ」に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

“ありがとうございました!!”

敬具

匿名

大会運営を支えた裏方スタッフなくして、このような観戦者の感謝の声は生まれなかったことでしょう。

『茨城開催報告書』には、右写真のような試合の様子の写真や記事も多く掲載されています。大会後に県特別功労賞を受けた、当時の鹿島アントラーズ6選手（現在も現役の選手もいます!）の写真等もあり、楽しくよむことができると思います。



当館では、他にも1994年～2002年発行のワールドカップ関係の行政刊行物を多数公開しており、当館閲覧室でよむことができます（HPでの資料検索可）。展示の見学と併せて気軽に足をお運びください。

（史科学芸部 行政資料課 首席研究員 小倉 朗）

## 収蔵資料紹介（考古部門）

## 「鬼瓦」

## ちょうじゃやしき 長者屋敷遺跡出土

こちらの資料は5月21日まで当館2階の常設展示室にてご覧になれます



当館が所蔵する考古資料から、長者屋敷遺跡出土の「鬼瓦」を紹介します。

常陸太田市の大里町から薬谷町にかけて所在する長者屋敷遺跡は、炭化米や奈良・平安時代の土器や瓦がたびたび出土することから、古代の久慈郡の中心地で、郡の役所や郡の寺が建てられていた場所と考えられています。当遺跡は、1995年に県道の改良工事に伴い発掘調査が行われています。方形に巡ることが推定される溝が確認され、「久寺」と墨書きされた土器も出土しており、このことから郡の寺の存在がうかがえます。

当資料は、遺跡内に所在する畑地から耕作中に出土したものです。その後、土地所有者の方のご厚意によって当館に寄贈されました。古代の鬼瓦は県内でも数例しか出土した例がなく、しかもその多くが破片資料です。このような全容がわかる資料は大変貴重なものと言えるでしょう。

邪鬼を表した鬼瓦は、奈良時代に平城宮や大宰府<sup>だざいふ</sup>などで使用されたのが始まりで、やがてこれが全国に広がっていきます。当初は鬼の全身像を表現したものが、やがて顔面のみを表現した鬼瓦（鬼面紋鬼瓦 きめんもんおにがわら）へ変化していきます。当資料は当該期の鬼面紋鬼瓦と考えられます。

当資料は、平城宮や大宰府<sup>だざいふ</sup>で作られた鬼瓦と比較して類似する部分は少なく、むしろその円頭方形の形態や外縁の特徴など高句麗系<sup>こうくわ</sup>鬼瓦と類似することが指摘されています。「日本書紀」に、持統天皇元年（687年）、唐・新羅<sup>しらぎ</sup>連合軍に滅ぼされた高句麗の人々が常陸に移住してきたとの記録があります。長者屋敷遺跡から出土している遺物の中には大陸の影響を受けたと考えられるものが複数認められ、久慈郡の郡寺造営にはこうした渡来人の関与があったと想定されています。

（参考文献）

財団法人茨城県教育財団「主要地方道常陸那珂港山方線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 長者屋敷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第117集 1997

山本忠尚「鬼瓦」『日本の美術』第391号 至文堂 1998

黒澤彰哉「常陸における高句麗系瓦の受容について ―長者屋敷遺跡（葉谷廃寺跡）出土瓦の分析から―」『茨城県立歴史館報』第33号 2006

（史料学芸部 学芸課 首席研究員 小川 貴行）

## トピックス

### 平成 28 年度 下半期の歴史館

歴史館いちようまつり 11月1日(火)～23日(水・祝)

11月1日から23日を歴史館いちようまつりの期間と定め、さまざまな催し物を開催し、多くの来場者がありました。中でも、10日(木)から13日(日・県民の日)までは、いちよう並木のライトアップを実施し、黄金に輝く並木が来場したお客様を魅了していました。



ちょっと昔のあそび 1月9日(月・祝)

今回はお正月のあそびを中心に、折り紙で干支の「酉」を作ったり、こま回しをしたりして楽しみました。射的やけん玉などのおなじみのあそびも人気です。



各行事などについてのお問い合わせは、

茨城県立歴史館 教育普及課 電話 029-225-4425

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。

## --- お知らせ ---

春の特別展開催期間中2月4日(土)～3月20日(月・祝)の土・日・祝日、本館講堂の入口に、いれたてコーヒーなどをお楽しみいただける喫茶コーナーを開設いたします。皆様のおいでを心よりお待ちしております。

